



## 北海道新聞 8月9日夕刊掲載

## 解剖学第二講座 藤宮 峯子教授 コラム

私の専門分野の形態学で大切な事は、対象をよく観ることである。分子生物学や遺伝子工学などを駆使する現在の医学研究の場にあっても、顕微鏡で細胞の形をよく観察することは、病気の原因を探るために不可欠である。形態学者が細胞の形をよく観ないで、他の実験データだけで結論を出すことは、医者が患者の顔を見ないで、検査データだけで病気の診断をつけるのと同様、きわめて危険である。

よく観て、感じる。これは研究活動だけでなく、人間のあらゆる営みに必要なことではないだろうか？ 人と接するときや物事を判断するとき、曇りのない目で対象をじっと観て、かすかなメッセージを心で感じ取ったときに「観る」ということ

## 魚眼図

る。

対象をよく観ることは、観ながら心で感じる事でもある。人体が発する真実の声を聞くためには、虚心坦懐、素直な心でなければならぬ。研究で大発見をして、有名になろうという下心があれば、途端に相手は沈黙してしまう。顕微鏡の下に繰り広げられる自然の造形に魅せられ、細胞の美しい佇まいに素直に感動する心をもつていけば、病的な現象を即座に

理が見えてくる。逆に他者から観られる事は、心の内面まで暴かれることであり、巧妙に策を弄しても、悪事はいつか暴かれるものだ。結局、この世を生きているというとは、策を弄することではなく、自分が観る立場であれ、観られる立場であれ、内面をきれいにして感性を高めておく事が大切と思

（藤宮峯子・札幌医科大学教授＝解剖学）